

国立工芸館の歴史的建築物

国立工芸館の建物は、明治時代（1868-1912）建てられた2つの木造建築を移築・改築・改装したものである。1つは旧陸軍第九師団司令部庁舎、もう1つは旧陸軍偕行社である。どちらも19世紀後半の貴重な洋風建築として、1997年に有形文化財に登録された。

歴史的背景

明治時代の建築物の特徴は、西洋の影響を受けていることである。日本は2世紀以上にわたる鎖国を経て、1854年、はるかに優れた火力を持つアメリカ海軍の艦隊の来訪により、強制的に開国させられた。このとき日本は、欧米諸国とのパワーバランスの崩れを自覚し、急速な近代化の道を読み始めた。当時、日本の指導者の多くは、建築を含む西洋文化の要素を取り入れることが、その差を縮める早道だと考えていた。外国人建築家を招聘することもあったが、国内の建築家が独自に西洋の建築物の外観を模倣することもあった。

旧陸軍第九師団司令部庁舎

当館の正面玄関の左手にある建物は、かつて大日本帝国陸軍第九師団の司令部であった。同師団は1898年に創設され、金沢城二ノ丸に司令部が置かれた。第二次世界大戦後は、金沢大学本部、健民公社、博物館の収蔵庫などとして再利用、改修、移築が繰り返された。2017年から現在の場所に移築し、当時の外観を復元するプロジェクトが始まり、2020年に完成した。

この建築は、左右対称、二列の窓、ピラスターとペディメントを用いた外観など、19世紀後半の建築によく見られる要素である。内部は、中央の広々とした玄関ホールから、ケヤキ材の無垢の階段が続いている。階段を挟む一対の柱の上部には、ギリシャ・ローマの円柱によく見られる装飾であるアカンサスの葉が漆喰で施されている。また、窓は日本の伝統的な建築様式である横開きではなく、縦開きのスライド式になっている。

旧陸軍偕行社

当館正面玄関の右手にある旧陸軍偕行社は、1909年に高位将校の親睦の場としてこの付近に建設された建物である。第二次世界大戦後は市の国税局を経て、近隣の能楽堂の控室、隣接する石川県立歴史博物館の収蔵庫、そして県の複数の事務所として利用されてきた。旧第九師団司令部同様、こちらも2017年から2020年にかけて現在地に移築・復元された。

将軍倶楽部の屋根の中央部分は、マンサード屋根の特徴である4方向の二重勾配で、上部付近が急勾配、軒先のすぐ上は緩やかに広がっている。マンサード屋根は、特に18～19世紀のフランス

に特徴的な屋根である。また、ファサードのコリント式ピラスターや屋根のドーマーウィンドウなど、バロツク的な要素も取り入れられ、無名の建築家の技術力の高さがうかがえるデザインとなっている。

外観上の不自然な点は、建物の基部にある換気口の格子に五芒星（星形）が描かれていることだ。これは帝国陸軍の軍服にも刺繍されていた吉祥のシンボルである。その由来や、なぜ軍隊のシンボルになったかは諸説があるが、星は「多魔除け」と呼ばれていた。また、別の文字で書くと「弾除け」の意味にもなる。